
Stand

ばるでら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Stand

【Nコード】

N5058I

【作者名】

ばるでら

【あらすじ】

人型ロボになんのメリットも無いって事くらい知ってる
それでもアレにはなにものにも変えられないロマンがある…………

ロボものです

年上女性×少年

をやリたかつたんだが…………結果目も当てられないくらいにACF

Aっぽくなった

ロボもAMSみたいなんついてるし……

QBみたいなん付いてるし……

武器変えられるし……

……

ぱ、パクリじゃねえ!! 似ただけ!!

実質3章ぐらいからのスタートなんですよね諸事情で

1はどうでもいいので省きますが2章は後々

b y : i

久しいな――

彼女は黒に染まる部屋に入った瞬間、誰ともなしに虚空に向かって
呟いた

彼女から伸びる光は彼女の数メートル先で力を失い、更に先は闇に
閉ざされている

しかし呟やきの後彼女が見せた苦笑いは闇に閉ざされた先に何かを
見つけてしまったようなものだ

迷いなく彼女の左腕が伸び、壁に付いたスイッチが押される

ゴウン………と起動音の少しの間の後に入る照明と空調

10×10程の部屋の奥の壁に備え付けられている様々なモニター
類と通信機器に無数の入力装置、それら全てが眩い人工の光に照ら
され露わになる

そして稼働した空調システムによって澱んだ空気の循環が行われて
嚴重なセキュリティで管理され、ここ7年の間たったの一人も侵入
を許さなかったその部屋の空気は主人の来訪によってかき乱され、
足下に積もった埃は心なしか姿を見せなかった主人を軽く責めるか
のように舞い上がった

「掃除が必要だな……」

空気中の塵や埃は自動的に吸い込まれる様になっているが7年の空
白の結果はしっかりと目に見えてしまっている

明日にでもスタンにやらせるか……
と弟子の明日の行動予定を立てつつ、彼女は椅子の両脇についた輪
に手を添え、グツと力を籠めた

神経接続型の義肢が主流であり、それだけでなくも電動式の車椅子が
殆どの今では非常に珍しい手動の車椅子を操る彼女の左足の部分は、
中身のないパンツの布だけが地面に向かって伸びていたそのまま前
に進んだ車椅子は中央に位置する一際巨大なモニターの前で停止する

長く光を失い埃まみれの入力デバイスから何かを読み取るようにそ
つとなぞる人差し指。同時に反射した自分を写すディスプレイに
向けられる目線

「まさかアイツのオペレーターをやる羽目になるとはな………」

はあ……とため息の後、彼女は何かを思い出したのか諦めの入った
笑いを見せ、そしてそのまま過去に浸るようにゆっくりと目を閉じる

静寂に包まれた部屋の中、思い出を揺藍に、唯一音を響かす空調音
を子守歌に眠る彼女を妨げるものはない

a r d・i (前書き)

いやstandardに平穩とかって意味は無いことぐらいわかってますよ

……無いですよね？

基本的にPC使わない限りあんまり推敲しないんで誤字脱字はお察し下さい

朝は弱い。掃除はしない。料理はここ10年しているのを見たことがなければ食べたこともない

見かけは実年齢が何かのジョークに思えてしまえる程なのに出不精の上付き合いは悪く、恋人どころか友人は両手で数えられる程度で、更には変なところで世間知らず

確かに彼女は足を一本失っているため車椅子であるが、それが彼女にとって運動機能の面では何のハンデにもならない事は嫌と言うほど知っている

そしてハンデにならない〃何かするというわけでもないという事もボロの出始めた2年目くらいに気付いた。基本的に生活面はだらしないヒトなのだと

だからこそあの人は自分がいない約1年。一体どうやって生活してたんだろう……と、あらゆる角度から真剣に考察し始めた青年は手元のフライパンの中で目玉焼きから焼けた卵に変わりつつある今日の朝食に気が付いて、慌てて火を止めた

火を止めた時には既に頭の中はサイドメニューのサラダのドレッシングに切り替わっており、さっきまでの考察は完全に霧散

毎朝ついつい考えてしまう謎はどうやら明日もいい暇つぶしになってくれそうだ

素材の味を殺さないように、よく研がれた包丁に映る相貌は幼さを残し青年と言うには幼すぎ、しかし少年としては大きすぎる顔立ち癖のついた栗毛と相俟って公共の放送に乗れば青い果実大好きのお姉さま（幅広い意味で）方に大受けし、そうでなくともちよつとした街角マダムキラーになりうる素質は十分だろう

しかし包丁を持つ腕の裾からのぞく腕はは、顔とは不釣り合いに太く、明らかに一般人のそれではない

もつとも一番に目立つのは彼の首もとから一面に広がる酷い火傷痕命に関わるレベルだったろう傷痕は彼が一般にいう《不幸》な過去を持つている事を伺わせるが、まるで包丁に羽が生えたかのように操る彼の表情に暗いところは無く、どころか楽しげでもあった

「……………終わっただけ」

一通り作業を終え、リビングの木製テーブルには、一皿に2枚のトースト。別皿には目玉焼きにウインナーが添えてあり、両サイドにはコーンスープとトマトサラダ

全て完成するまでに25分。ある程度の準備は昨晚に済ませていたし、そこに関してはまずまずだな……と納得するが

青年はある事に頭を悩ませる

青年お手製の見た目から食欲をそそる朝食の中。向かい合った席の中央。つまりテーブルのど真ん中に鎮座する巨大な皿。そして中に大量に盛られたポテトと鱈のフライ。フィッシュ&チップス。多い。

ひたすらに

つまり客観的に見て余計な装飾を廃し極々簡潔に彼なりの言葉で言うなら

—— 昨日の夕飯の残り、だ

「なーんでこんなに作りすぎちゃったかなー……」

うなだれた青年は手を伸ばしポテト一つ掴み口に運んだ。一晩たったポテトはしんなりしてしまっただがまあ美味い。お弁当にもギリギリ行けそうである。……度を過ぎなければ、の話だが

きっかけは毎朝の謎の提供者である元保護者兼師匠兼オペレーターで彼女にしては珍しいリクエストだった

「スタン。今日はフィッシュ&チップスが食べたい」

買い物に出かける際、何気なくかけられた彼女の一声。スタンは青年の名で、彼女は二人にいるときはあまり彼を名前で呼ばない

名前で呼ぶとすれば仕事等のある程度重要な要件か、あるいは彼女がスタンに怒りの鉄槌を下す時かと言うのがお決まりだ

その為夕飯のリクエストを重要事項にされた事に少し驚き、その時は生返事で答え家を出て、その後リクエストの中身自体に首を傾げる

彩の乏しい食事を嫌い、更に師としてスタンに食事制限を課してくる彼女がよりによって油と炭水化物の塊とは一体どういう風の吹き回しか……

思い悩むまま店に向かって歩き、そして屋台で思い当たる。今日が何の日かという事を

今日は9年程前、初めて二人で外に出かけた日で、その時あんまりにも喋らないスタンに困り果てたのだろう。多分その打開策として買って貰ったのが――

「――フィッシュ&チップスか……………」

そんな事を思い出してついつい興が乗り、大量に作ってしまった訳だ
スタンは鱈のフライを一掴みし、口へ運ぶ
一晩で染み込んでしまった塩とビネガーの風味が鱈のコクと絡み合
って口の中に広がり、その味はなんとも

「……………まあ、まずまず」

「まずまずなのは結構だが……………減らんな、その山……………」

鱈のフライを咀嚼し、揚げ方の反省点を洗い出していたスタンの後ろからかけられる、朝にふさわしくないウンザリしたような声は車輪の音と共にスタンの後方からテーブルを回り込むように

「んー。今日のお弁当にでもします。……………自業自得ですしね」
返した返事がこれまた辟易したような声色になってしまったのは、きつとしようがない事だろう

「別に今日の朝もソレでよかったんだぞ？」

「そんなのは僕のプライドが許しませんよ」

それにこの油っこさは流石に胃にくる。彼女なら尚更だろう。昨日も割とすぐに手が止まっていたし

昨日は

——最近油ものが食えなくなったなあ……と嘆く彼女に

——年ですかね。と出かけた所を無理やりポテトと共に胃に押し込んだ。万が一口に出ていたら3日は口を聞いて貰えない

彼女は殊勝な事だ。と苦笑いし、車椅子から狙いの椅子の両脇についた手すりを支えに腕の力で体を持ち上げ、一瞬片足立ちになるようにして移動した

冷蔵庫から出したオレンジジュースをコップに注ぎ、トーストの横に置いたスタンと椅子の上でテーブルに向かい、体勢を整えた彼女は目が合う

「おはようスタン」

スタンが口に加えたポテトを見て何かを思い出したのだろう。見せた笑みは朝日に纏って見とれる程綺麗だ

春の朝。日差しは柔らかく、風も優しい。穏やかな挨拶にスタンも自然と笑みがこぼれた

「ええ、おはようございます。キーラさん」

a r d . 2 (前書き)

途中でなに書いてんのか分かんなくなってきたのは秘密。面倒にな
ってきたのも秘密
てか台詞いてえー！ー！！まじで！！

きっかけは本当に些細な違和感だった

しかしその些細だった筈の違和感は綿雪のように少しずつ少しずつ降り積もっていき、果てには途方もなく巨大な壁となっていた

それでも最初はどうにか無視できていた。年頃の女のように夢を見ることで現実から目をそらして

だがその重さは無視するだけでは抗えなかった。重さから生まれる軋みは心に膿を作り出し、今はもうどうすることも出来ない

——だから今日、彼女はソレを口にする事に決めた

万が一心の傷にならないかと心配したが、一度動かしてしまった流れはどうしようもない

「……………ーラ…ん」

私の言葉でお前が癒されることの無い傷を負い、それで私を恨むなら全て甘んじて受けよう

「……………キーラ…さ」

我慢出来なかった以上わたしはそれまでの女と言う事だったのだからそれにお前をそのように育てたのは紛れもないこの私だ

「キーラさん。聞いてますか？」

だが忘れないでほしい

このままではきつとお前が損をする

だからそれに気付かせてやる事が、私が身勝手な母親として最後に出来ることなんだ

「キーラさん。僕はもう行きますから。忘れないか心配なのでキーラさんのお弁当は僕が持っていけます。家を出る時は戸締まりと火の栓の確認忘れないくださいね？あと……あー、ハンカチとちり紙は食器棚の上ですし、一度シャワーを浴びられるなら着替えは脱衣場に用意してます。脱いだのはちゃんと洗濯機にお願いしますよ？それと食器は水に漬けて置いてください」

どうにも思う

「……お前は、可愛くなくなったなあ」

「おかげさまで。しっかりしなきゃダメでしたすから」

キーラの長い長い葛藤の未放たれた一言はとてもあっさりしたノータイムの一言で片付けられた
しかも言葉の後に深いため息付き

「……………」

「……どうしました？」

「あいな。そういうところが——」

「——可愛くない。……でしょう？」

聞き飽きました。とばかりにこちらに目をやる事無くひらひらと手を振るスタンがなおのこと憎らしい

しばらくキーラは恨めしげな視線を送っていたが、やめた。これではどちらが子供かわからない

確かにスタンはしっかりしている。それは良いことだがこれはいかんせん老成し過ぎでは無かろうか

キーラとしてはもう少しやんちゃに育って欲しかったのだが、このままではスタンは人一倍早く老衰を迎えてしまいそうだ

それに、その《しっかり》にはどうにも歪で大きな穴がある

「じゃあ僕行きますから…………二度寝しないで下さいよ？」

「ちょっと待て」

キーラは今まさに家を出ようと屈んで靴ひもを結び直し、手をドアに手をかけたスタンを呼び止めた。きょとんとした顔。ここだけ見れば年相応なのだが

「なんです？」

振り返るスタンを手招きし、呼び寄せる。キーラが差し出したのは一枚のメモ用紙。そこにはびっしりと分刻みで1日のスケジュールがかかっていた

「お前は今日は自主トレだ。メニューはこの通り。サボるなよ」

「あ、はい。サボりはしないですけど……………」

キーラさんは？と言いたげな目線。キーラはそれに頭でつかちと会議だだけ答える

「マネージャー頭でつかちと？……………何でまた」

ここですぐ察せ無いあたりがキーラがどうにも不安な要因の一つだろう

金銭を含めた運営戦略担当との交渉といえはすぐさま感づいても良さそうなものなのに

「賃金交渉」

「は……。はい？」

「なんだ。反応が鈍いな」

「いや、だって。お金なら」

困ってない。言葉には出さずともスタンの言葉は伝わってくる

スタンとキーラは企業の持つ軍隊に所属している

企業のカードとしての軍事力とビジネスとしての傭兵家業を兼ね、特に兵器を商う会社は自社製品のアピールを兼ねるそれへの投資を惜しまない

それは人的財産もしかりだ。優秀な人材には企業は金を惜しまない。希に登場する平凡な製品を伝説まで押し上げてしまうような怪物は企業にとってもほかの何者にも代え難い

例えば希少価値こそあれど、実力は未知数のスタンの契約金でさえしばらく遊んで暮らせるぐらいの金額だった

それは普通なら充分過ぎる額なのだろう。だが二人はとうに普通など捨ててしまっている

「金なら、なんだ。まさか充分だとしても？馬鹿を言うな」

故にキーラは語気を強めた。スタンはどこか金銭自体に悪を感じている節がある。ある種の潔癖症に近いそれはスタンが東洋の血を引いている事にもあるかもしれない

清貧を美德とする気質は確かに美しいものだが、それでは困る。スタンにはもっとその辺りに執着してもらわなければならない

「金があれば大抵の事は解決できる。確かにお前は対価の為に入った訳じゃないだろうが、考えてみる。お前の言う【困ってる人達】の悩みの大半は金で解決できるんじゃないのか？」

スタンは喉に何かを無理やり詰められたような感覚を覚えた
回らない口に、いつもより過敏に動く頭

ぐるぐると回るのは人、人、人、人。赤く赤く燃える街。住処を焼かれ立ち尽くすあの人。争いで親を無くし貧困にあえでいた子供。戦火から逃れたくても逃れられない彼らはきつと金があればそうはならなくて。……なにより争いの要因そのものも思い返せば結局は金だった

「いいか？お前はどんな経緯であれ企業軍隊のハイレン型パイロット^{ジョーカ}になった。ただの駒だった前とは違う。もう戦場ではお前が戦術そのものなんだ。自分の価値を認めろ」

「命を惜しめ。最大の対価を要求しろ。お前はこれから大量の人間を殺す。山ほどの人間を不幸にする。それで得られるモノが低廉な物でたまるか。人の命の価値は奪うにしろ与えるにしろ決して安くない」

「そしてお前はその金で殺した人間以上の人を助けるなりまた殺すなりなんなりすればいい。お前の望みを叶えるために私はテーブルについてお前を戦場に送り出すさ。私はお前に幸せになって欲しいからな」

「……………一応言うておくが名誉の戦死なんてもつてのほかだぞ。そんなものに幸せなどありはしない」

……………そこに残るのは実感のわかない虚しい賞賛と途方もない喪失感だけだ

口元だけの笑みを見せるキーラが発した言葉は恐ろしい程冷たく、寂しく、部屋に響く

「命令だ。何があろうと誰になんと罵られようと帰ってこい。死ぬのは散々人を助け倒して腰が曲がってからでいいだろう？それにな」

一息置いて、キーラは今までで一番深刻な表情と声で

「——お前が死んだら、誰が私の世話をするんだ」

そういつてのけた

「……………はあ？」

「いや、だから。私の身の回りの世話」

スタンはキーラに呆けた声で聞き返して、結局同じ返事が返ってきたところで

一気にスタンの力が抜け、張り詰めていた空気は雪解けどころかバーナーで暖めたように緩んだ

まさかそうオトしてくるとは。口に出さず呟く

「……自分でやって下さいよ」

「無理を言う。今後一生店屋物だけで生きていけるわけ無いだろ」

スタンは深いため息をつく。この人は本当にどこからどこまでが本気なのか。そればかりは今もわからない。笑いながら本気で語り、真剣な顔をして冗談を言う。一部の人以上にはまるで鉄仮面のくせにだが確かなのはきつとこの人はとても自分を心配している。大切に思ってくれている

そしてそれは逆も然りだ

「わかりました。出来るだけキーラさんのご期待に添います。……

お金の事は……まあ、とにかくお願いします」

「任せておけ」

スタンの言葉に帰ってきた返事はとても力強い。きつとキーラはスタンに取って最高の結果を出してくれるだろう。スタンはあまり望んで居なかったにしろ、気持ちとしては心強い

再び、行ってきますと家を出たスタンをキーラは、ああとだけ言葉を返して見送った

「さて……」

スタンを見送ったキーラは、やれやれと苦笑した。その後グーツと体を伸ばすと思った以上に気持ちいい。やはり深夜のデスクワークは地味に体に負担をかけているようだ。……昔は徹夜なんて……と想着てキーラは後悔した。自分で認めてどうする

伸びの際に見えた時計は朝の8:30

今日のアポイントをとった時間は11:30だ。さして場所は遠くない。タクシーを利用すれば10分もあればつく

と、なればすることは一つ

「……もう一眠りするか」

睡眠不足は加齢の友。若さを保つ為には十分な睡眠時間が必要だ。別段身なりに気を使うわけではないがどうにもスタンを始めとした自分への扱いが変わってきたような気がする。というか確実に変わってきている

やむをえん。やむをえないんだ……と自分に言い聞かせつつ寢室に戻っていくキーラ

その後、彼女の叫びが近所に響いたのは、約束の15分前になった時だった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5058i/>

Stand

2010年10月12日04時22分発行